栗原藤七郎

『東洋の米　西洋の小麦
——比較経済論的研究』

保　志　恂

(一)

東洋文化と西洋文化の本質をめぐる論議は諸側面より多角的に行なわれてきた。文化人類学、社会経済史学、社会学、経営史、農法論等の諸領域は、最近の業績が特に眼につく領域である。わが国においてもこの論議は、事ある毎にくり返される。それはわが国の文化が東洋的文化を土壌として西洋文化の輸入の上に成立してきたし、現在でも、例えば農業にとってみると水稲機械化農法の導入のように西洋文化の達成を摂取しようとの姿勢にあるからである。西洋文化の無批判的機械的模倣でなく、真の摂取たる為には、両文化の普遍性と特殊性、及びその相互移行の諸条件を適確にとらえていなくてはならない。

ここでとりあげた『東洋の米　西洋の小麦』という書物は、東洋文明と西洋文明を農業文明の側面から考察したものである。しかして「米と小麦は東洋と西洋とのおもな食料であり、かつおのおのの農業の根幹をなすものであり、その生産および消費様式は東西両文明に著しい影響を与えている」（はしがき）という観点から、基本的には米と小麦から両農業文明を説明しようとされる。しかし、著者は単純に、米＝東洋文明、小麦＝西洋文明として比較してはいない。西洋にも米作があり、東洋にも小麦作はあるのである。それ故「米と小麦が東西両洋の文明あるいは文化に及ぼす影響は大きいのであるが、そのことが米あるいは小麦の固有の特質からきているとのみ考えることは早計である。むしろ逆に米と小麦のもつ諸特色はそれらが主として生産され、あるいは消費される地域の文明の諸特性によって規定されているとみるべきであろう」（四頁）。こうしてアジア的米作とヨーロッパ的小麦作とを比較対照させつつ、農法から経済構造にまで及ぶのである。かような、米と小麦との対照という著眼は、ユニークなものと云えよう。しかもこの観点からきわめて多面的に問題を扱い、数多い業績を渉猟して整理しておられる。本書の構成は次のとおりである。

はしがき

書評　栗原藤七郎『東洋の米　西洋の小麦―比較経済論的研究』

第一章　総説
第二章　米と小麦の生産分布
第三章　米と小麦の食料体系
第四章　ヨーロッパの有畜畑作農業とアジアの無畜水田農業
第五章　米と小麦の地力維持方式
第六章　水田及び畑と畜力、機械力
第七章　生産構造
第八章　イタリア及びアメリカの米作の素描
第九章　米と小麦の流通および加工その一
第一〇章　〃　その二
第一一章　米と小麦の消費形態
第一二章　東洋と西洋の農村社会構造
第一三章　むすび

この構成でわかるとおり本書の関説する範囲はきわめて広範囲なもので、著者自身云うとおりその一つ一つが特別の研究分野をなすような問題をもっている。したがって本書は概論に止まっており、著者の意図も一面において学術的研究であるが、同時にかなり普及的な目的をもつものとされている。それ故、以下のように論理展開を対象とした批判をするのは、必ずしも適切ではないかもしれないが、そうかといって内容紹介をするには問題が広範にすぎる。そこで私なりにうけとった著者の考え方について問題と感じた点を述べてみたい。

(二)

本書について、第一に問題と思われるのは本書の立論の基調が著者自身、そこにおち入ることを警戒しておられる「わゆる「地理的唯物論」の立場におち入ってしまってはいないかということである。著者は米と小麦の農法、経済構造の差異を次のように説明される。アジアの米作農法の基本的特質は灌漑、無畜、連作であり、これに対し、ヨーロッパの小麦作農法は、非灌漑、有畜、輪作と特徴づけうる。この差異はどこから出たか。無畜、有畜の差異は、アジアの風土が草の利用に適さず、牧畜の生育にも好適でないのに対し、ヨーロッパの風土がその逆であること、又牧畜に必要な森林資源の利用がアジアでは洪水調節、水資源涵養の見地から行なわれ、草地的利用を排除したことに帰着される。連作、輪作の差異は、基本的にアジアのモンスーン型の高温多湿の気象条件が連作を可能ならしめたとし、これに水の地力維持機能を加え、さらにアジアの人口密度の高さが、土地生産性の高い連作農法を導いたとする。ヨーロッパの輪作は「冷涼乾燥」の気象、小麦の地力掠奪的性格、水のような地力維持体をもたない畑作の特質、牧畜との結合、等から説明される。かように、風土、人口という客観的、主観的条件を

ふくめて、農法の差異を主として自然条件の差異から説明されるのである。もっとも農法の差異そのものはかなり強く風土的条件に影響されるものであるから、著者の論述も興味深く、教えられるところも多いのであるが、著者は更に、かような農法の差異からアジアと西洋の経済構造の差異を説明しようとされるのである。

すなわち、アジアの水田農法は零細小規模、労働集約的農法であり、土地生産性は高いが、自給自足的封鎖的保守的で商品経済を内部から発達させ得ない。したがって「村落共同体的なもの」（この点については後述）を破壊する農業革命を達成し得ず、資本主義経済を内部から発達させ得ない。これに対し、ヨーロッパの農法は、大面積耕作で労働生産性高く技術の向上、単位面積あたり収量の向上により剰余の商品化の可能性がでるので、内部から商品化が可能であり、村落共同体をこわす農業革命を達成して資本主義経済を発達させ得たというのである。

このあたり、著者の叙述はウイットフォーゲルや、マックスウエーバーの理論にかなり影響されているように思われる。

ところで著者の立論がかような論理でさいごまで一貫しているかというとそうでなく、結びの項にいたって飛躍した結論が出てくる。「日本の水田の土地面積当たり生産力は既述のごとく高いが、労働生産性は低く、米の生産価格を高くする。しかしながらこの水田農業の労働生産性の低位は、すでにイタリア、アメリカ等の米作についてみたように、米作に固有の性格ではなく単にアジア的水田方式の結果であるにすぎない。……アジア的特性を改革すべき時機に今や到達している。日本の水田農業の大規模機械化は決して不可能ではない。そしてそれによって、水田と畜産、とくに乳牛との結合の道も開けてくることはイタリヤの米作などにみられるとおりである」（二二九～二三一頁）。「また現在の日本の到達している諸条件は、従来のようなアジア型零細水田経営を改革すべき条件を具備しているといえる。工業の発達による農機具、肥料、農薬、電力、セメント等の農業生産手段の供給、教育の普及による農業者の知的水準の向上等の諸条件は日本の水田農業を改革すべき時期の到来をつげるものである」（二三〇頁）。

ここで云われているアジア的特性とは何であろうか。又それは如何なる要因で形成されたものか。著者の立場では、無畜、連作の農法、零細小規模労働集約的経営がアジア的特性であり、それは主としてアジアの風土に根拠をおくものであった。アジアとヨーロッパの風土的条件は昔と今とで大きな差異がないと思われるのに、何故近年にいたってアジア的特性を変える大規模機械化が可能になるのだろうか。著者の立場では、工業の発達による技術水準の向上と、農業者の知的水準の向上が可能にす

る条件ということになる。するとアジア的特性は、技術水準の低さ、農民の無知等を条件としたものであったのであろうか。とすればそうした一定の条件のもとにアジア的特性が存在し得たことを著者はその論理展開の中に入れるべきであった。

私なりの考え方を簡単に述べれば、著者が結びで論じたような立場、すなわち、アジア的特質もヨーロッパ的特質も（そのとらえ方は別として）固定したものでなく一定の条件では相互移行が可能であるという考え方に賛成なのである。では相互移行は如何にして可能か、著者のようにアジア的特質を風土的条件から形成されたものと捉える限り、その可能性、又可能にする条件は明らかにされないのであって、風土的条件に影響されつつ、一定の歴史的段階（生産力と生産関係の一定の段階）に形成されたものとみるべきである。この点について私自身十分に詰めてはいないが、両文化の特質のわかれた歴史的段階は、奴隷制の段階であり、アジア的特質は、アジア的総体的奴隷制、即ちアジア的生産様式として形成されたものとみたい。アジア的生産様式とアジア的農法の関連について仔細に論ずることは別の機会にしなければならないが、例えば、土地生産性追求的農法にしても、デスポットが土地所有者として、種族共同体の土地占有に対立し、共同体ぐるみ奴隷にし、直接集団労働の使役も行なったが、主として共同体の生産物を貢納せしめたという総体的奴隷制の構造が大きな影響を与えているのではないか。この点はヨーロッパ古典古代の奴隷制の形態と対比してみるとき明らかとなる。総体的奴隷制の段階に、生産力の低い段階で、アジア的デスポットが水田をとらえたということ、ここにアジア的特質をときあかす鍵があるのではないか。しかし、アジア的生産様式はあくまで一定の歴史的段階の所産であり、封建制、資本制への推移は西洋でも東洋でも普遍的に貫徹している。奴隷制の段階に印切された農法は、封建制、資本制への推移、生産力、技術水準の向上と共にその性格を変え普遍性の側面が強くなってゆく。とくに資本制が共同体を破壊するときが大きな転機であり、資本主義の諸類型の問題となってゆく。実はこの段階で最も明瞭となるのだが、東洋と西洋という対比では不十分となり、より国別、民族別の問題としてみなければならなくなるのではないか。かように社会経済構成体の発展が普遍的であるということ、ここに東洋農法と西洋農法の相互転化の可能性の基礎があるのであろうし、農法の内部論理からも普遍性をみとめ得よう。

著者の豊富な文献を渉猟しての問題整理には敬意を表しつつも、いま少し考察に発展段階的視角と、したがって又、東洋文化と西洋文化との差異ばかりでなく普遍性についての洞察とを望みたかったのである。

（三）

以上は本書の基調をなしているとみられる考え方に対する批判である。その外、こまかな点で幾つか疑問に思われることがあるので簡単にふれておこう。

アジア的共同体の性格の理解で、著者は、アジアでは個人の土地に対する永続的占有制が早く成立したとされるのであるが、アジア的共同体では個人とデスポットの間に種族共同体ないし家父長的大家族が存在する。土地の永続的占有は、こうした共同体のものであってその中での個人はせいぜい一定の時期の利用を継続させたにすぎない。著者は、アジアの村落共同体を否定し、村落共同体を西洋についてのみ認めるのだが、この点は、共同体を耕地の定期割替使用形態と同一視する考え方と結びついており、又アジア的共同体に対する誤解に発していると思われる。

農耕文化の発生、労働手段の発生についての学説として著者はハーンの学説を紹介しておられる。しかし、最近この学説に対しウェルト（Werth, Emile）がかなり有力な批判を行なっている。

ヨーロッパの労働手段の発展について著者は無輪犂より有輪犂へととらえているが、これは問題がある。イギリスに関する限りその逆であることは椎名重明氏が明らかにされた。

除草について、著者は、モンスーン型のアジアで非常に重大な問題であり、ヨーロッパでは雑草が繁茂せず、農法上重要な位置を占めないとみているが、これは必ずしも当らないようである。この点は加用信文氏が夙に批判しておられるが、ヨーロッパでは輪作のなかで除草機能が遂行されており、手労働に依存しないから雑草が余り問題でないように見えるだけであって、有害な雑草の存在することにおいて、したがって除草の重大性においてはヨーロッパもアジアも差がないものとみる方が正しいように思われる。

次にアメリカ農法の展望について著者は近年施肥（化学肥料の投下）が行なわれていることからヨーロッパ化するというふうにとらえている。一方ヨーロッパ農業は、アメリカの機械化を逆輸入してアメリカ化するということになり、これではどういうことなのかわからなくなる。私見では最近のアメリカ農法の評価は、動力機械化を機軸として、作物技術の進歩にも支えられる農法の新しい段階（輪栽式からの解放）と、とらえるべきではないかと思う。

（四）

以上、私なりの理解で問題と感じたところを記した。しかし

書評　栗原藤七郎『東洋の米　西洋の小麦―比較経済論的研究』

私の誤解・誤読によるところもあろうかと思われ、そうした点については、著者の御教示を得たいと思う。

叙上の批判点はそれとして、本書は最初に紹介したように、生産分布から農法、生産構造、流通加工、消費、農村社会構造の多方面にわたって基礎的諸文献を渉猟整理し、問題を探っており、教えられるところ多かった。立場は多少異なっても吸収しうることの多い著作である。農業における東洋と西洋という領域の問題について、これほど包括的に扱われたものはおそらく戦後の農業経済学界で最初のものではなかろうか。問題の重要性にかんする著者の著眼には敬意を表したいのである。

こんご、この領域にかんし、この労作を契機として一層の掘り下げが行なわれなければならない。斯界もマルクスの遺稿「資本制生産に先行する諸形態」の解釈に安住せず、技術的基礎をも含めて、具体的な史実による肉づけを行なうこと（社会学の領域ではあるていど行なわれているが）が要求されよう。それが私自身をも含めて、後学の者に与えられた課題といえよう。